

# GLA 随想 7 GLA の歴史と三つの柱

GLA を憂う元会員

2013 年 5 月 10 日 第 1 版

# 目次

1	はじめに	1
2	信次先生の時代	3
3	会員の選抜と鍛錬の時代	5
3.1	法の継承時の選抜 . . . . .	5
3.2	外れた予言による選抜 . . . . .	5
3.3	1980 年代後半の学びによる選抜 . . . . .	6
3.4	佳子先生に与えられた「よびかけ」について . . . . .	7
3.5	「人」と「理」の深化 . . . . .	8
4	三つの柱の鼎立の時代	9
4.1	1990 年、伝道の再開 . . . . .	9
4.2	1992 年、生活実践の導入 . . . . .	9
4.3	1992 年、TL 人間学講座の開催 . . . . .	10
4.4	1994 年以降の歩み . . . . .	10

# 1 はじめに

先に公開しました「GLA 随想 2, 3」のレポートでは、「歴史の整備」について私の考えを發表させて頂きましたが、実は重要なテーマについて言及を避けてきました。それは、「GLA の三つの柱」すなわち「人」「理」「場・システム」という視点から眺めた GLA の歴史についてです。

私がこのテーマについて言及を避けてきた理由は、GLA の歴史の悲しい側面に触れることになり、多くの方々に「とらわれ」を引き起こす縁になってしまうように思われたためです。しかし、「GLA 随想 5」のレポートで發表させて頂いたように、今後、弟子が GLA 共同体の様々な方針を立案し具現してゆくためには、在家の皆様の「押し上げる力」と職員の皆様の「引き上げる力」が響働することが必要であり、そのためには、このテーマを避けて通ることができないのではないかと考え直しました。

そこで、様々な制約が生じることは承知の上で、私の考えを發表させて頂くことにしました。

「GLA の三つの柱」すなわち「人」「理」「場・システム」という言葉から思い出されるのは、1997 年に起こった「三つのビッグバン」のことではないでしょうか。「三つのビッグバン」とは、「真我誕生の次元への梯子」「GLA21 年の光跡の結実」「真の靈道への道」です。そして、「GLA21 年の光跡の結実」とは、佳子先生の 21 年の御歩みによって「GLA の三つの柱」すなわち「人」「理」「場・システム」が鼎立されたということでした。

しかし、「GLA の三つの柱」は 1997 年に完成したのではなく、その後も充実され続けているということが解ります。まず、「人」という側面から考えますと、1997 年以降、より広い層の方々が GLA に集ってこられたという傾向が見受けられるのではないのでしょうか。つまり、1997 年以前には集ってこられなかったような方々が GLA に集ってこられるようになったということです。

1997 年時点で発刊されていた佳子先生の御著書（「DISCOVERY」「希望の原理」「グランドチャレンジ」等）と、最近の御著書を比較しますと、最近の御著書の方が読み進めやすいということに気づかれるのではないのでしょうか。つまり、1997 年時点の御著書にはなかなか共感できなかつたとしても、最近

の御著書であれば共感できる方が数多くおられ、1997年以降にはそのような方々を含めるように会員層が広がったのではないのでしょうか。

このように、「人」という側面において、新たな会員層が生じるとしますと、この新たな会員層の皆様にも真我誕生を果たしてゆけるように、お世話を果たす側の「人」も充実させる必要が生じますし、「理」および「場・システム」という側面においても一層充実させてゆく必要が生じます。GLA 創立四十周年記念プロジェクトの「7つのプログラム」も、「人」「理」「場・システム」をバランスよく充実させてゆく歩みの一つであると考えられます。

現在、GLA に入会希望される方々には、面接の場が持たれ、担当者の方が入会承認の是非を判断されることになっています。その際、例えば「信次先生の御著書には共感できるけれども佳子先生の御著書には共感できない」という人や、ノイローゼなどによって様子がおかしい人には入会が承認されないようです。それは、『そのような方々でも真我誕生を果たしてゆけるような「人（お世話する側の人）」「理」「場・システム」が整っていない』ということが理由ではないのでしょうか。従って、「人」「理」「場・システム」を整えてゆける目処が立つならば、そのような方々にも入会して頂く道が整ってくるのではないかと思います。

世界伝道においても、「人」「理」「場・システム」のバランスが重要ではないのでしょうか。つまり、最初に集って頂くべき「人」（外国人）として、どのような人を想定するのか明確にする必要があります。最初の段階では、外国人の方々に学んで頂くための「人」「理」「場・システム」がほとんど整っていないため、そのハンディを克服して研鑽を進めてゆけるだけの高い志を持った方々に限って入会して頂く必要があるのではないのでしょうか。

そして、「人（他の外国人をお世話する外国人）」「理」「場・システム」を段階的に充実させてゆくことにより、入会して頂ける「人」の範囲も広げてゆくことができるのではないのでしょうか。

## 2 信次先生の時代

信次先生の御著書では「霊道現象」および「憑依からの救済」ということが大きなテーマとして取り上げられています。そのため、霊的な事に興味を抱く人々や憑依に悩む人々の注目を集めることになったのではないのでしょうか。そして、信次先生の時代では、おそらく「来る者は拒まず」という方針で、入会希望者に対して「入会をお断りする」ということもほとんど無かったのではないかと思います。

その結果として何が起こったのかということ、信次先生の御著書「悪霊Ⅰ」の88～89ページにあります次の御文章から考えてみたいと思います。

### 恐ろしい他力信仰

1974年1月、九州の宮崎市郊外の国民宿舎で、三百人近くの希望者による研修会が開催された。……

二泊三日の研修会の参加者は、九州地方を中心とした会員である。そして、ほとんどの人は、何らかの信仰を持ち、いわば信仰体験者であった。……

参加者の八割は不調和な地獄霊と交渉を持っている気の毒な人びとであった。

ある女性は、心の曇りを除くことなく神想観に夢中になったため、地獄霊に支配されていた。このため、廃人同様のありさまであった。また、法華経の行者となり、先祖供養の意味も知らず、肉体先祖に憑依されている者もいる。自分の耳もとで地獄霊のささやきが聞こえ、自分を失っている者も何人かいた。

「研修会の参加者の八割は不調和な地獄霊と交渉を持っている」というのは、現在のGLAからはとても想像できない状態ですが、「憑依からの救済」というテーマを掲げて「来る者は拒まず」という方針を貫けば、そうなってしまうことは、ある意味では当然の結果でもあったように思えます。

しかし、当時のGLAには、そのようにして集ってこられた方々をお世話できるだけの「人」「理」「場・システム」は整備されていませんでした。従って、

その方々に対するお世話は信次先生お一人に背負って頂く側面が大きくならざるを得なかったのではないのでしょうか。

信次先生は悪霊に憑依された多くの人々を救済されましたが、「多くの」とは、「一人の人間が救済した人の数としては多い」ということであって、世界中で憑依に苦しむ人々の総数から見ると微々たる人数でしかありません。さらに、信次先生の取られた方針を貫くとする、信次先生が御帰天された後はどうするのか、という問題についても先が見えてきません。

私たちは、憑依に悩む人々の苦しみを我が苦しみとして受けとめ、その人々に手を差し伸べることができない痛みを持ち続けなければならないと思います。しかし、直接的に手を差し伸べる時期は、「人」「理」「場・システム」を相応に整備した後でなければならず、それ以前に憑依問題に立ち向かったとしても、それは「焼け石に水」であり、「先が見えない」ことではないのでしょうか。

では、信次先生のされたことは「焼け石に水」であり「先が見えない」ことに過ぎないのかと問われますと、そうではないと思います。信次先生は神の御意志に基づいて動いておられたわけですから、そこには必ず重要な意味があるはずです。

GLA 共同体が今後とも「人」「理」「場・システム」の充実を果たしてゆきますと、やがて憑依問題に正面から立ち向かえる時が訪れるのではないのでしょうか。それは、何百年後になるのか解りませんが、その時には、信次先生の果たされた救済が、世界中で大規模に、かつ継続的に再現されてゆくのではないかと思います。その時代には、信次先生の御著書やご映像などの記録が、弟子にとって何よりの指針になるでしょう。その意味では、信次先生の果たされた救済は、極めて有意義なものであったと考えます。

しかし、短期的に見れば、信次先生の時代には「人」「理」「場・システム」が整っていないにもかかわらず不相応に広い範囲の方々を会員として受け入れてしまったという事実は否めません。そのことは、後述します「会員の選抜」という悲しい出来事が最初から予定されていたということではないかと思われま

## 3 会員の選抜と鍛錬の時代

### 3.1 法の継承時の選抜

「GLA 随想3」のレポートの「3.3 鍛錬のさらなる意味」の節では、「法の継承時の鍛錬には、佳子先生についてゆきたいと思えない人には、信次先生の法に基づいて研鑽を進めて頂くという意味もあった」という私の考えを發表させて頂きました。

これは、言葉を変えると、「佳子先生についてゆきたいと思えない人には自ら GLA を去って頂くような状況を整えた」ということであり、「会員の選抜が行なわれた」という意味にも考えることができます。

その時代には、まだ「人」「理」「場・システム」が整っていなかったわけですから、「それでも佳子先生についてゆきたい」と思える志の高い方の割合を高めて、GLA の場を醸成してゆく必要があったのではないのでしょうか。そのため、それが出来ない方々には GLA を去って頂く必要があったのではないかと思われます。

### 3.2 外れた予言による選抜

「GLA 随想2」のレポートの「2.2 1981年の予言」の節では、「『1981年に世界的なショックが襲う』との予言が外れた理由は、『私たちは自らの内界を知って浄化してゆくことが大切なのだ』という風土を GLA の場に醸成してゆくためであった」という私の考えを發表させて頂きました。

しかし、超常現象に対する興味から GLA に入会された人々のうち、「自らのまなざしを内界に向ける」という方向に意識を転換できなかった人々もおられたのではないかと思います。その人々は、「予言が外れた」という事実に基づいて佳子先生に幻滅し、GLA を去ってゆかれたのではないのでしょうか。

これは、言葉を変えると、「超常現象に対する興味から離れられず、自らのまなざしを内界に向けることができない方々には、GLA を去って頂くような状況を整えた」ということであり、やはり「会員の選抜が行なわれた」という意味にも考えることができます。

1981年に大事件が起こるとの予言は信次先生もされました。但し、信次先生も佳子先生も予言をされた時点では「GLAの場を醸成する」あるいは「会員の選抜を行なう」ということは認識されておらず、本当に1981年に大事件が起きるものと認識されていたのではないのでしょうか。

この出来事から、「信次先生、佳子先生を動かしておられる偉大な叡智の持ち主がおられ、その方こそ大なる存在、神であり、GLAを導いて下さっている方である」ということも実感して頂けるのではないかと思います。「会員を選抜し、GLAの場を変革する」ということは神が計画され実行されたことのように見受けられます。信次先生も、佳子先生も、私たちから見ると大変に偉大な方ではありますが、神と比較すると、いと小さき存在ではないのでしょうか。

### 3.3 1980年代後半の学びによる選抜

「GLA随想2」のレポートの「2.3 1980年代後半の学び」の節で述べましたように、この時代の学び（「人間のまなざし」シリーズ、人生のアルファとオメガ）は、内容の高度さ、および分量の多さという点から、非常に厳しいものであったと思います。私自身は「これは厳しい。とてもついていけない」と思いましたし、当時の多くの会員の皆様もそのように思って耐えてこられたのではないのでしょうか。

「これは厳しい。とてもついていけない」と思うまでは、殆ど全ての会員に共通であったと思いますが、その後に考えることは人それぞれで違っていたのではないのでしょうか。「佳子先生がなさっている事でもあるし、自分のできる範囲内で努力してついてゆくしかない」と思われた方もおられるでしょう。一方、GLAの外に目が向いて「もっと解りやすく神理を伝授してくれるところはないだろうか」と探し始めた方もおられたのではないのでしょうか。信次先生の時代からの会員ならば、「信次先生は、このような厳しい教え方はされなかった。あの頃のGLAのほうがよかった」と、信次先生への郷愁に浸る方もおられたのではないのでしょうか。

そこに、絶妙のタイミングで大川隆法氏、そして彼の率いる幸福の科学が出現したように思えます。大川氏は、1986年～1988年にかけて、「高橋信次霊



言集」などと称する、信次先生の名を冠した 10 冊以上もの本を発刊しました。これらの霊言集は内容が軽薄であるがゆえに、その意味において「解りやすい」ものであり、「信次先生」、「解りやすさ」を求めている方々のニーズにぴったりと嵌ったのではないのでしょうか。これに引き寄せられて GLA から幸福の科学に多くの会員が流れていったようです。

「人間のまなざし」シリーズの御著書が発刊された時期と、大川氏による「高橋信次」シリーズの発刊時期とが重なっているのは、単なる偶然でしょうか。私は、そこに神の経緯を感じずにはられません。すなわち、その事が「選抜のためであった」と思えるのです。

### 3.4 佳子先生に与えられた「よびかけ」について

本項に認めさせて頂く内容は、根拠が希薄で、私自身もどこまで正しいのか確信を持ちづらいことでもありますが、その制約をご承知頂いた上でご一読頂ければと思います。

もう四半世紀以上前のことになりますが、あるセミナーで佳子先生の体調が悪化するという事件が起こりました。それがいつのセミナーであったのか、はっきりとした記憶はありませんが、「人間のまなざし」シリーズの御著書の発刊が始まる前か始まった直後か、その頃の出来事でした。佳子先生からご講義を頂いているとき、私は佳子先生の体調不良に全く気づきませんでした。後から職員の方が登壇されて次のようなこととお話されました。

「先生は、セミナーの少し前から体調がとても悪い状態で、私達もどうなることかと心配していましたが、そのようなそぶりを全くお見せになることなく、御指導を下さいました」

私は、この職員の方のお話をお聞きして、「佳子先生でも体調が悪くなるということがあるのか」と驚いたことを記憶しています。

今、この事件の原因を考えてみましたところ、思い当たることがあります。それは、当時、「人間のまなざし」シリーズの御著書、および GLA 誌に連載される人生のアルファとオメガについて、「原稿をどンドン執筆するように」と佳子先生は神から促されていたのではないのでしょうか。

しかし、佳子先生は神からの促しを実行に移すことをためらっておられたのではないのでしょうか。あるいは、「神の御意志を間違っ受けて止めたかもしれない」と危惧されたのかもかもしれません。

なぜなら、もし、促された通りの事を実行に移すと、ついてゆけなくなって GLA を離脱する会員が続出することが予想されるからです。神は、「佳子先生の体調を悪化させる」という手段によって「命じた通りのことを速やかに遂行せよ」と呼びかけられたのではないのでしょうか。

私達人間が「神の御意志のままに生きたい」と志すのであれば、この種の試練に遭遇することは避けられないのかもかもしれません。

### 3.5 「人」と「理」の深化

1980 年代には、「人間のまなざし」シリーズおよび GLA 誌に連載された「人生のアルファとオメガ」によって、基盤論、自業論、響働論の三論の基礎が整ってきた時代であったと思います。すなわち、より多くの方々をお世話してゆくための「理」の側面が充実してきたのではないのでしょうか。

また、厳しい鍛錬を通じて、基盤論、自業論、響働論を体認体解して生きる人が増えてきたことにより、「人」の側面においても充実してきた時代であったと思います。それは、「人生の基盤に対する同苦同哀の想い」という言葉で表現できるのではないかと思います。

例えば、自己顕示欲の強い人に出会ったとき、「あの人は自己顕示欲が強くて、嫌な人だな」と思うような雰囲気、あるいは「わかり方」というものが以前の GLA には見られたのではないかと思います。しかし、1980 年代後半の鍛錬を経た後は、「あの人の自己顕示欲が強いのは、人生の基盤がそのようにさせているからである。人生の基盤の内容は一人一人違うけれども、人生の基盤に支配されてしまうことは私達も同じだ」と想えるようになったのではないのでしょうか。

## 4 三つの柱の鼎立の時代

### 4.1 1990年、伝道の再開

1990年以前は、GLAは伝道には積極的ではありませんでした。当時、佳子先生は、「GLAを大きくすることより、まず本物を作ってゆきましょう」と仰っていたことを記憶しています。その状況が一変したのが1990年、東京ベイNKホールにて、一般向けの講演会が開催されたことでした。1991年には、13年ぶりに一般向け書籍である「サイレントコーリング」が発刊され、引き続いて「人間の絆」三部作が発刊されました。これにより、GLA共同体は再び伝道に向けて動き始めました。

### 4.2 1992年、生活実践の導入

1992年には生活実践が導入されました。生活実践では、5～6人ほどの会員が一グループを形成しますが、その中で、窓口およびサブ窓口の方が場の責任者という事になります。私自身も何度か生活実践に参入させて頂いたことがあり、窓口およびサブ窓口の方々に出会わせて頂きました。そのお一人お一人は、足りない所を抱えつつも、上述しました「人生の基盤に対する同苦同哀の想い」を確かに持つておられたのではないかと思います。その事こそ、窓口およびサブ窓口の役割を担って頂くための何よりの条件ではないでしょうか。

そして、その条件を備えた方々が、全国的に十分な割合で輩出していることこそ、生活実践を発足させる条件ではなかったかと思われます。1992年までの鍛錬によって、その条件が充足されたのではないのでしょうか。

窓口およびサブ窓口以外のメンバーについては、様々な方がおられます。人生の基盤について、それほど理解されていない方もおられます。そのような方々であっても、生活実践に参入され、窓口およびサブ窓口の方々とは接することによって感化されてゆくのではないのでしょうか。生活実践はそのような可能性を抱いた場であると思います。

### 4.3 1992年、TL人間学講座の開催

また、1992年には全国各地においてTL人間学講座の開催が始まり、GLAの伝道が本格化しました。TL人間学講座などを通して「GLAが伝道に積極的になる」ということは、「あまり志の高くない方でも入会される機会が増える」ということでもあります。

しかし、そのような方々であっても、GLAの場に生まれ、やがてGLAの場を担って下さる方々になる、その準備が整ったのが1992年であったのではないのでしょうか。より具体的には、その方々を育むための最大の要素は生活実践であるように思われます。そうしますと、1992年からGLAが積極的な伝道を展開できるようになった要因は、生活実践を発足させたからであり、仮に生活実践が無ければ、積極的な伝道も有り得なかったのではないかと思われます。

すなわち、積極的な伝道によりGLAに入会される方々とその方々をお世話する方々という「人」の側面、基盤論、自業論、響働論という「理」の側面、そして生活実践という「システム」という側面がバランスよく整備され始めたのが1992年であったのではないのでしょうか。

### 4.4 1994年以降の歩み

1994年にはニュープロジェクトが発足し、1995年には青年塾SRSが発足するなど青年塾の研鑽が充実してきました。1996年には経営、医療、教育の三分野が統合され「開けゆくみち」が創設されました。また、1995年には伝道研鑽部会が仮発足し、1996年に本発足しました。このように、1996年には、現在とほぼ同様の組織形態すなわち「システム」が充実してきたことになります。

なお、1994年以降に構築されたシステムの「願い」「目的」などについては、ボーディ・サットヴァ・ウィズダムに詳述されているものと思われます。私自身は同ウィズダムを拝読したことはありませんが、1994年以降に三つの柱が如何に充実してきたのかは、同ウィズダムを拝読できる方にまとめて頂ければと思います。

以上